

論文の内容の要旨

氏名：渡辺 桜

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：保育実践上の「葛藤」の主体的変容に関する臨床教育学的研究

序章 「葛藤」概念の捉え直しを目指して

（１） 目的と問題の所在

本研究の目的は、保育実践上の「葛藤」を人・物・場の相互関係＝関係論として捉えることにより、保育課題の具体的解決を促すことである。

これまで、保育実践研究の葛藤問題は、保育者個々の心理の問題＝心理主義的に捉えられ、解釈されてきた。したがって、「保育者の感性を磨いて」「子どもの内面に寄り添う」という精神論によって曖昧にされてきており、具体的にどのような環境や援助であれば、「子どもの内面に寄り添う」ことが可能になるのかは、明確に議論されていない現状がある（木村，2006；平木，1990；寺見・西垣，2000；後藤，2000）。つまり、保育者が、明日からの保育で具体的にどのような環境や援助をしていけばよいのかわからないということが少なくない。しかし、保育実践上の葛藤は、人・物・場の相互関係性の問題、つまり、関係論としての「葛藤」（渡辺，2006・2008・2010・2014）である。したがって、本研究で取り上げる関係論としての「葛藤」には、広く一般的に、あるいは、それぞれの学問の分野で用いられる概念としての葛藤と区別するために「 」を付けることとする。

（２） 研究方法

本研究は、今津(2011)の介入参画法に依拠し、エスノグラフィーにより仮説生成を行う。介入参画法とは、「個人や人々ないし集団あるいは組織に対して、さまざまな役割をもつ介入的実践(intervener)が問題解決のために変化を生じさせるはたらきかけを指す」(今津，2011)のものであり、本研究に照合すれば、この介入的実践者が研究者となる。

第1章 臨床教育学における保育者の「葛藤」研究の意義

庄井(2002)、新堀(2001)は、臨床教育学によって、従来触れられてこなかった具体的な場面が抱える問題に研究者が向き合うことの重要性に言及している。保育実践研究においては、研究者が保育者の「葛藤」を踏まえて実際の保育を見ることがその前提となる。つまり、保育実践を人・物・場の関係論として読み解かねばならない。そこで、本研究では、集団保育を遂行している保育者が実践当事者として「かかわりながら見る」ことと、主体的な遊びを保障するための規範理論(小川，2010)を分析の視点としながら、エスノグラフィーを行う。

第2章 保育における保育者の「葛藤」の客観的条件と質的段階

【研究1・2】によって、環境構成や保育者の身体的モデル性、つまり、人的環境としての保育者の援助によっても「葛藤」の質的变化が認められた。したがって、集団保育における保育者の「葛藤」概念は、心理主義的ではなく関係論的にとらえることによってよりよく解釈することができ、かつ質的变化の方途を見だしやすいと考えられる。

第3章 保育実践上の「葛藤」解決方略をめぐる方法論的検討

(1) 対象

本研究で研究対象としたのは、以下の3園である。

- 1) 愛知県の3年保育を実施している公立A幼稚園のM保育者(保育経験1年目4歳児担任時、2年目5歳児担任時)。
- 2) 岐阜県私立N幼稚園C保育者(保育経験2年目)。
- 3) 愛知県の3年保育を実施している公立H幼稚園のW保育者。W保育者は、保育経験2年目で調査対象時は4歳児担任。

(2) データ

1) 観察記録

A幼稚園は2004年4月～2007年3月の間、N幼稚園は2007年10月～2008年3月の間、H幼稚園は2010年7月～2010年12月、各月に4～6回程度保育観察を行う。観察方法は自然観察法。園や担任保育者との信頼関係が成立し、研究者の意図に賛同を得られた後にビデオ撮影も行う。観察記録には、保育室環境図、保育者・幼児の言動、幼児や保育者の位置、身体の向き、遊びの流れについて時間を追って記す。

2) インタビュー

観察記録ならびに保育観察時に撮影したビデオを持参し、約1時間程度のインタビューを行う。保育者が観察記録やビデオを観ながら語ることで、観察では捉えられなかった保育者の「こういうつもりだった」という部分について具体的場面を通して明らかにすると同時に、筆者の主観と保育者の「つもり」のズレを明確にする。以上の作業を経ても、明らかにならなかった部分について最後に筆者から保育者にたずねた。H幼稚園については、保育者集団との「対話」も含む。

(3) 分析方法

1) 観察記録ならびにビデオ撮影によるデータから、保育者の保育行為と環境構成が幼児の遊びと関係しているということをどれだけ自覚しているかについて診断する。

2) インタビューデータより、まずは研究者の「対話」のあり方について評価分析する。研究者は保育者の「葛藤」の質的段階を判断し、1)に挙げた保育の実践についての診断や保育者の反省的思考を引き出す「対話」ができたかを反省的に分析する。

3) 研究者の「対話」能力の診断後、保育者の語りより、どのような意図のもとに環境を構成し援助を遂行しているのか、保育者が抱えている「葛藤」の視点から明らかにする。また、保育者が自身の身体的援助や環境構成と幼児の遊びとの関係性についてどれだけ自覚していたかを観察記録との整合性を通して考察する。

4) 1)～3)より「葛藤」の質的段階とその段階における保育課題とを明らかにし、そこに研究者がどうかかわりうるのか検証する。

第4章 保育者の「葛藤」の質的段階に応じた主体的変容の可能性

【研究3】

新任保育者の「葛藤」は、気になる子がいるが集団の中でどう関わったらよいかわからないといった全体把握と個の援助の連関に対するものではあるものの、具体的な「葛藤」の要因が認識されていない。新任保育者は、保育そのものに向かうまでに、様々な不安等があることは当然だが、だからこそ、そこに関わる研究者は、新任保育者の多岐に渡る保育課題に対して、できないところを責めるのではなく、第三者記録やビデオデータより客観的事実からできているところを具体的にほめ、その保育行為が子どもたちや遊びにどう影響を与えていくのかを丁寧に意味づけていく必要がある。

【研究4】

遊びの消滅に問題を感じていない＝「葛藤」に無自覚である場合、「葛藤」の客観的条件を意識化することにより、コーナー遊びの安定性(持続性、にぎわい感)が得られることが認められた。また、コーナー遊びの安定性が高まるには、幼児同士で遊びを持続的に進めていくことへの意識化とコーナー遊びをその場の遊びのみとして切り取って捉えるのではなく、他の遊びやコーナー、他児とのつながりの延長上にあると捉える、すなわち「葛藤」の客観的条件を総合的に意識していく必要性が示唆された。

【研究5】

無自覚と表層の往復運動段階にある「葛藤」の保育課題は、応答的な環境としてのコーナーの配置や存在感といった物的環境において、保育者の動作モデル的役割がどのコーナーにおいても発揮されることである。研究者は、その保育課題を保育者が自覚できるよう保育者の「葛藤」要因が研究者の見た事実とどう関連しているのかについて研究者自身が問いをもち、「対話」していくことの重要性が示唆された。

【研究6】

表層と可視の往復運動段階にある「葛藤」の保育課題は、幼児に観られていることを意識した遊びのモデル的役割である。その保育課題を保育者自身が自覚化するためには、研究者の保育観察に基づいた「葛藤」の客観的条件に関わる客観的事実の言語化の重要性が示唆された。そしてそれらを可能にするために研究者は、保育者との「対話」と観察記録(ビデオ)を照合しながら自身の保育診断や語りについての省察を継続的に行い、保育を観る目や保育者との対話力を高めなくてはならないことが明らかになった。

第5章 保育者集団の「葛藤」の主体的変容の可能性

～保育者集団と研究者の継続的な関わりを通して～

【研究7】

保育者集団と研究者との継続的な関わりを通して、複数の保育者の「葛藤」の主体的変容が認められた。それは、保育者集団との「対話」を通して、研究者の分析・説得を保育者自身の援助に結び付け、それがどのように幼児の遊び状況に影響を与えるのかを具体的な場面で分析したり、その上で新たな自身の課題を語るという姿が見られた。これは、研究者の「対話」の戦略がモデルとなっていると推察される。

終章

【研究3～7】より、「葛藤」を関係論として捉え、保育者が自身の保育課題と向き合うための具体的方策とは、以下の通りである。

- ① 保育者の「葛藤」の質的段階を人・物・場の関係性により診断する
- ② 研究者の「葛藤」に対する診断と保育者との「対話」をすり合わせ、「対話」の戦略を練る
- ③ 保育実践を撮影したビデオを視聴しながら客観的事実をもとに、どういう状態が遊べていると診断できるのか、逆にどういう状態を遊びが停滞・衰退していると診断できるのかを解説することで、保育者がそれを意識しながら保育実践につなげていけるように促す
- ④ ②の保育状況が環境構成や保育者の身体的援助とどのように関わり合っているのかについて解説することで、人・物・場のかかわり合いが意識化できるよう促す
- ⑤ 保育者の心理状態に合わせ、解説と共感・同調のバランスを図り、③④を通して保育者が自身の保育課題を自覚し、「葛藤」と向き合えるよう促す
- ⑥ 「対話」分析の視点ア～ウ(渡辺, 2010)を基に、研究者と保育者との「対話」を分析し、次回の「対話」への戦略を練り直す
- ⑦ ①～⑥の繰り返し

これらを踏まえ、保育者集団が育つという視点に立てば、今津(2011)の言う組織文化の検討も重要である。組織として「葛藤」を主体的に変容させるためには、研究者が園の組織とどのような戦略のもとに継続的にかかわるかという問題もある。本研究の継続研究として、園の組織が「葛藤」を主体的に変容させていくプロセスを明らかにするためのエスノグラフィーを今後の課題の一つとしていきたい。